

<研究ノート>売春と臓器移植における交換と贈与

著者	井上 章一, 森岡 正博
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	2
ページ	97-106
発行年	1990-03-10
その他の言語のタイトル	Exchange and Presentation on Prostitution and Organ Transplants
URL	http://doi.org/10.15055/00000944

〈研究ノート〉

売春と臓器移植における交換と贈与

井上章一・森岡正博

井上 私は、このごろひとつの疑問をいだいているんですよ。倫理に関するものなんです。これを、倫理学に関心のあるあなたに聞いてみたいんですが、いいでしょうか。

森岡 なにをおっしゃる。井上さんのほうが、「現代倫理」については敏感でしょう。私もかねてから井上さんにおたずねしたかったことがあるのです。それは、人のからだに関する現代のパラドックスについてなんです……。

井上 はあ、からだですか。では、私から切り出させてください。今の倫理は、売春という行為を罪悪視していますね。からだを売るのはよくないと。これが私には分らない。いや、気持ちとしては分かるけど、論理的に分らない。私はいま、知識を切り売っていますが、これはあまり批判されないのに、なぜ体の売買はいけないのか。

森岡 井上さん、少し待ってください。「体の売買」とは一体なんのことですか？ そもそも「体の売買」という概念と、

「売春」という概念は、はたして同一なのでしょうか。

井上 うーん。論理的なやりとりですね。さすがに日文研のヴィットゲンシュタインと評される森岡さんだけのことはあります。あのね、筋肉労働者とよばれるひとたちがいるでしょう。彼らもまあ、ある意味で「体をはって」「体売って」いるわけです。しかし、その彼らは筋肉労働をしているからといって非難されることはない。まあ買手の資本家が、搾取者として批判されるぐらいかな。では、なぜ、「性」とつながる「体の売買」＝「売春」だけが、これほどまでに批判されるのか。おたずねしたいのはそこです。

森岡 井上さんは私の問題提起に答えないうまま、論旨を展開されようとしています。たとえば、井上さんは、「体の売買」＝「売春」というふうに、この二つの概念を等号で結んでいきます。しかし本当にそれでよいのでしょうか。ちょっと考えてみれば分かるように、売春によって売買されているものは、決し

て「体」ではありません。そこで売買されたもの、すなわち貨幣と交換されたものは、「体」のではなく、たとえば「快楽」とか「欲望の充実」などの、いわば精神的な、目に見えないもの、触れないものなのです。ですから、売春を「体」の売買としてとらえる井上さん（そして世間のよくある言説）は、問題の本質をそもそもはじめから取り逃がしているわけです。

井上 あなたはいつもそういう議論の立て方をします。たしかに「売春」≡「体の売買」ではない。だけど、だからといって「売春」はなぜ倫理的によくないのかという質問をしてはいけないということにはならないでしょう。

森岡 それはそうです。

井上 「体の売買」といういいまわしは、ひとつの比喻です。正確に「体」を売買するわけじゃない。世間では、筋肉労働や売春の比喻にこれをつかう。ただ、なぜ売春だけが悪く言われるのか。ここに疑問をいただいているというだけのことですよ。

森岡 私たちは「からだ」ということばの持つ意味と、そのことばの使われ方に対して、もっと敏感になった方がいいと思わうんですよ。

井上 わかりました。じゃ、「からだ」からははなれましょう。なぜ「売春」はよくないのかという私の疑問に、「からだ」とは無関係でいいですから答えてください。

森岡 井上さんのはぐらかしには納得いきませんが、まあ、話を進めましょう。

井上 知識の切り売りは許される。体の切り売りでも、筋肉労働ならかまわない。だが、売春はだめだ。現代社会にあるこの倫理は、いったい何を根拠にしているのか分からない。フーリングとしては、私も売春はよくないと思うのですが、それはいったいなぜなのでしょう。善悪のきめては、いったい、どこにあるんですか。

森岡 このように理解してよいでしょうか。自分の持って生まれたものを使って商売をすることは、現代ではほとんどが認められているのに、売春だけは違う。その理由を述べよというわけです。

井上 まあ、そういうことです。

森岡 ここで補足しておくべき点があると思います。売春は有史以来絶えたことはありませんし、現在もなお存在しています。売春は事実としては現存する。しかし倫理的には、それは存在してはならないとされている。問うべきは、なぜ売春を事実上存続させてきた我々が、規範レベルではそれを否定し続けるのか、という点ではないでしょうか。

井上 社会党にとっての自衛隊みたいな話ですね。しかし、やや違う。現存するにもかかわらず倫理的には存在すべきではないといわれてきたものは、たくさんあります。殺人とか、強盗とかですね。だけど、売春はそういった被害者のある犯罪ではない。にもかかわらず悪いとされる。ここですよ、わからないのは。

森岡 しかし、売春婦は被害者だという議論もありますよ。
井上 そりゃあね、遊廓経営者によるピンハネとか、いろんな搾取はありましたよ。売春婦は、被害者でしたよね、遊廓制度下では。しかしね、搾取がなくなれば売春は肯定されるのかというと、そんなことはない。やはり本質的に悪いとされる。なぜですか。

森岡 ちょっと待ってください。売春は、倫理的に言っても本質的に悪いと、本当にみなされているのですか？ 資料の裏付けが欲しいですね。いま仮にそれを認めておくとして、売春にはもうひとつの社会的判断があります。それは「必要悪」という判断です。必要悪とは、売春をいったん悪と認めておきながらも、それを「必要悪」の観点から、肯定する思想です。この必要性は、とりあえず男性にとっての必要性ですね。

つまり、売春は悪いとする言説の中にも、それを本質的に悪いとして否定する思想と、それを必要悪として肯定する思想の、正反対の二つの考え方が混在しているのです。これはいわゆるダブル・スタンダード、表と裏の構造ですね。井上さんはこの二重構造の表の面だけを強調されているように見えますが……。

井上 必要悪というのは、本質的には悪いけど、必要だからその存在を認めざるをえないということじゃないのかな。だから、森岡さんのいうふたつの立場は、両方とも売春を本質的に悪いと決めつける点で、同じだと思いますよ。

森岡 かりにその二つが「本質性」の点では同じだとしても、

一方は否定的、他方は肯定的という点では、決定的に異なると考えていただけますねえ。

井上 まあ、そんなことはどうでもよい。売春の話にもどりましょう。私には、それを悪いと決めつけるそのきめつけかたにも疑問がある。いろいろな批判があるんだけど、ほんらいはタダであるべきあんなものを高く売ってサギだ、靈感商法でゆるせない、といった批判はまずきません。なぜでしょう。
森岡 井上さんはいま問題の本質を突きましたね。そうです。「タダであるべきもの」がまさに売買されている。我々が議論すべき本質は、ここに隠されています。

井上 「タダであるべき」という点については、ちょっと自信がありません。こう言ったほうがいいでしょう。「本質的には値段などつけようのないもの」と。しかし、そう言ってしまうと、商品っていうものは、ほとんどみんなそうだな。ちょっと分からなくなってきた。

森岡 井上さん、ここは大事な点だから、慎重に聞いてくださいね。我々が問うべきは、「本質的に値段などつけようのないもの」ではなく、「本質的に値段なんかをつけるべきではないもの」なのです。この二つの概念には天地の開きがあります。結論を述べましょう。値段をつけるべきではないものに、値段をつけてしまうことへの、倫理的反発。これが、売春を本質的に悪いと決めつける人たちの、倫理的根拠なのでしょう。

井上 いや、そうでしょうか。では、森岡さんにうかがいま

す。そもそも本質的に値段をつけるものとは、いったいなにですか。そんなものがあるのですか。私には、貨幣の出現以後は、本質うんぬんはどうであろうと、あらゆるものに値段がつけられつつきていると思えます。筋肉労働にも、知識にも。ではなぜ、売春だけがいけないのか。どうでしょう、森岡さん。筋肉労働や知識は、本質的に値段がつけられるのですか。私には、たんに需要と供給の関係があるだけのように思えるのです。

森岡 井上さんの問題の立て方には若干おかしいところがある。ですから、私の言い方で説明させていただきます。市場のなかの交換財には、ほうっておいても値段がつけられます。これは事実の問題であって、決して倫理の問題ではありません。倫理の問題はむしろ、ある「もの」を、市場の中に交換財として投入するべきなのか否かという点で、働いてきます。

井上 えらい、むつかしい話になってきたな。それで？

森岡 ここで、ある種の倫理学は次のように言うでしょう。「もの」には、「値段をつけることが許されるもの」と、「値段をつけるべきではないもの」の、二種類がある。市場の中に投入して値段をつけることの許されるものには、たとえば「道具」がある。家を建てるための道具や、文房具など。もし筋肉労働のためのエネルギーや、知識の切り売りのための情報を「道具」と考えるならば、それらに値段をつけることは許されることになる。これに対して、決して値段をつけるべきではない

いものとしては、愛とか、人格などがある。これは「道具」としてではなく、「目的」として扱うべき性質のものである。

井上 知識だって、それじたいが「目的」になりうるもんやけどね。

森岡 うん。ところでセックスとは、単なる「道具」であってはならず、人と人との豊かに交わり合い互いを至福へと導くという、それ自体が「目的」であるような行為である。従って、セックスに値段をつけ、それを単なる道具のように扱うことは本質的に悪である。

ああ、代弁していて、思わず鳥肌が立ってきましたよ。学生時代を思い出すなあ。このような考えをもつ人々は、資本主義があらゆるものを交換財として呑み込んできた傾向を、なんとかしてでもくいとめたいのでしょね。

井上 だとすれば、倫理は、あらゆるものを商品化する資本主義の波にまいったをかける反動勢力。封建的桎梏による抵抗だということになります。そしてこの古めかしい桎梏は、今のところ資本主義に連戦連敗をつづけている。その最後のとりでのひとつが売春だというストーリーですよ。ですが、売春はずっと古くから悪い悪いと言われ続けてきた。超歴史的に悪いとされています。その理由を説明するのに、資本主義封建的桎梏という図式はそぐわない。売春を悪いときめつける根拠は、もっとべつのところにあるように思います。

森岡 正直に言いましょ。資本主義の波にまいったをかける

反動勢力としての倫理。これが現代の倫理学に期待されているひとつの役割なのです。

井上 うーむ。

森岡 ひとつ思いつきました。我々が売春を悪いと決めつけるのは、そう決めつけた方が、売春をやりやすいからです。

井上 なるほどわかります。売春を悪いときめつけたうえで性を買えば、悪いことをしたという気分も買える。悪のロマンにひたれる。そのロマンを高くうりつけるためには、売春を悪いと決めつけるほうがいいわけですね。しかし、あまりにピューリタンのというか、童貞少年的な理解ではないでしょうか。ソープランドに行つて、とにかくチチのどかいネーチャントのむでというオッサンには、そういうロマンはうれませぬよ。つまり、そういうロマンは、客の大半にはうれないわけです。倫理の根拠にはならないと思いますよ。

森岡 すさまじい論理展開ですね、井上さん。そもそも商売と倫理は次元が違うでしょうが。ところで、話は変わりますが、最近、性の商品化に反対するフェミニズム運動がありますね。

井上 ありますね。

森岡 その点についてのご意見をおきかせください。

井上 かりにですよ。売春はアプリオリに悪いんだと、そう決めます。とりあえず。さて、フェミニズムです。彼らはしばしば、女のセックス・アピールをうりものにしたポスターなどを性的商品化だ、売春につながるという批判します。ミスコ

ンテストも、同じノリで批判します。これが私には分からない。売春をアプリオリに悪だと決めつけても、理解できないのです。森岡 なるほど、百歩譲つて、売春は悪だと認めたとしても、それでもなおフェミニズムによるエロチック・ポスター攻撃は理解できないというわけですね。

井上 ちょっと歴史的な話をさせてください。封建時代には、「性を商品化」させていたのは売春しかありませんでした。しかし、今はちがいます。コンパニオンのはほえみ、ポスターでのセックス・アピールなど、直接肉体を売らないものでも商品になるようになりました。悪である売春からきりはなされた性についてのイメージ。単なるイメージでさえ売れるようになったのです。肉をうらなくてもいい。これは、脱売春化の傾向として、喜ぶべき近代のありかたなのではないでしょうか。

森岡 近代は脱売春化を推進する。新しいテーゼですね。でも、話はそんなに簡単ではありません。売春を悪と決めつける倫理の触手は、これら性の「イメージ」にまでも及んでくるでしょう。つまり、女性を「買う」男性の態度と、駅でモデルのポスターを見て内心喜ぶ男性の態度は、同根であり、ともに悪であるというわけです。

井上 ほんとうですか？ もしフェミニズムがそんなことを考えているとしたら、すさまじい話です。心のうちで姦淫したものは、事実上姦淫したも同じだ。犯罪の計画を心のなかで考えたものは、実行犯と同じだという理屈になってしまう。それ

はひどいですよ。

森岡 そういう理屈にはならないと思いますよ。同じになるのは「態度」であって、その「結果の評価」ではありませんからね。

井上 ちょっと話は変わりますが、性のイメージは、そう誰でも売れるというものじゃありません。やはり、エロチックな演出をするための才能がいる。天与の才能ですね。美貌とかね。

私は、性のイメージを売ることへの批判は、これら天与のエロスにめぐまれた女たちのあびる脚光に対するうらみのようなものからでていると思います。売春ならむしろいいわけですよ。

直接的な肉体を売るといふそれだけのことなら、たいていの女でも、そんなにエロスにめぐまれていない女でも、ふんざりひとつでできます。名古屋の駅うらじゃあ、七〇歳のバアさんが立つとるといふ話やしね。だけど肉を売らずに、イメージだけを売りつけることができるのはひとにぎりの女だけ。これは邪推かもしれませんが、私はフェミニズムがいうポスター・エロチズムへの批判は、売春批判より根が深いと思いますね。

森岡 なるほど。なるほど。

井上 ポスターは売春につながるから悪いというのはいわげですよ。レトリックにすぎません。ほんとうは、一部の美貌にめぐまれた女だけが脚光をあびるのがくやしんですよ。私は、売春からきりはなされたエロスイメージを売る近代の美女たちには、脱売春化の促進者として、むしろ拍手をおくるべき

だと思います。

森岡 ニーチェのルサンチマン理論にあと一步ですね。

井上 性のイメージを売る。これは脱売春的な近代の傾向です。これが悪いというなら、近代より前の封建時代にもどるしありません。つまり、性的な売りものがセックスそのものしかない時代へです。フェミニズムはそんな時代へもどれといっているのでしょうか。

森岡 性のイメージを売ることを批判するフェミニズムは、結果的に売春を肯定することになるといふパラドックスですね。上野千鶴子に聞かせてあげたいロジックです。

井上 世間にはいろいろな才能があるわけですよ。そして、できるだけ多くの、いろんな才能の芽をそだてる。出る杭だからといってうたない。これが近代のいいところだと思っんです。男たちをひきつける能力も、立派な才能ですが、なぜこれだけがあんなにたたかれなければならないのかということですね。売春をやつとるわけじゃないし。並の女なら、売春をしなれば性では金をかせげないけど、あのモデルたちは売春もせず金をかせいでズルいというわけでしょうか。

森岡 そういえば、日本の元首相の買春が発覚したとき、フェミニストたちは彼の行動を批判しました。面白かったのは、フェミニストたちが、首相と女性の大人ののおつきあい、つまり不倫そのものは悪ではないが、そのあとで彼が女性にお金を渡したことが悪いのだ、という論陣をはっていたことです。不倫

は良いが売春は悪い。これは要するに、タダなら良いが金をとると悪い、という論理です。

井上 じつは私もそう思いました。たいていのひとは、そんなんやないかな。

森岡 この話を聞いたとき、私の頭にひらめいたものがあります。それは臓器移植です。日本での臓器移植は（通常のものも、脳死の人からのものも）すべて提供者からの無償の善意、すなわちタダの贈り物という形をとっています。かつてアメリカで臓器が売買されたケースがありますが、世論の強烈なプレッシャーによって消滅してしまいました。日本人がフィリピンに臓器を買いに行ったことが判明したときの、マスコミの反応も大変なものでした。なかでも注目すべきは、フィリピンへの臓器買いにもっとも強力に反対したのは、日本での臓器移植を推進している当の医師たちであったという事実です。彼らは、臓器が市場で売買されるというイメージを国民に与えたら、移植は今後けっして定着しないと判断したのです。

井上 へーっ。それは知りませんでした。

森岡 売春に見られる、タダなら良いが金をとると悪いという論理構造は、まったく同じ形で、臓器移植にもあてはまるのです。この点は、いままで誰によっても指摘されてきませんでした。

井上 臓器売買の場合は、文字どおり体を売つとるわけですね。売春の場合は「体を売る」というのが比喩になっている

やけど、これは直喩です。それに、売春への批判は倫理どまりですが、臓器売買の場合は、倫理の範囲だけにはとどまらず、現実的にもかんがりのプレッシャーになるでしょう。

森岡 刑法上の問題も発生するでしょうし、臓器移植はすでに政治問題化していますからね。

私は、売春と臓器移植に見られるこの論理構造の問題は、現代における、「からだ」にかかわる「交換」と「贈与」の問題系ではないかと感じています。貨幣を介した市場での交換によって人間活動が運営されている現代日本において、セックスや臓器移植という相互行為に対しては、貨幣交換によってではなく、贈与によって運営すべきであるという、倫理のプレッシャーが働く。セックスの行為そのものは、たしかに快感の「物々交換」かも知れませんが、男と女の性的な出会いそのものは、贈与か掠奪かのどちらかです。

井上 私をうばってとか、君がほしいとかやな。

森岡 思うのですが、現代の倫理は我々に、次のようなことを要求しているのでしょうか。セックスにおける贈与の見返りは、たとえば具体的な性交渉行為そのものの中（性交に参与しているという満足感）にだけ見出せ。あるいは自分のセックス・アピールの贈与の見返りは、他人の視線がもたらす快楽の中だけに見出せ。要するにセックスのカテゴリーの外での見返りを期待するな。臓器提供における臓器の贈与の見返りは、臓器を提供するという行為のただ中（たとえば人類愛への奉仕）にだけ

見出せ。臓器提供の外に見返りを期待するな。このようなストイックな固い込みの思想が、タダなら良いが金をとると悪いという論理の基盤になっている可能性があります。

井上 なるほどね。でも、売春と臓器売買はやっばりちがいますよ。たとえば、臓器の写真を売買しても誰も怒りませんよね。いけないのは直接の臓器売買だけです。セックス以上に、その売買が禁じられている臓器でも、イメージの流通はみとめられている。なのに、セックスについてのイメージはそうではない。売春は臓器売買にくらべれば公認されているようなものだけど、性のイメージを売買することは、臓器のイメージで同じことをするより、ずっといけないとされる。不思議ですね。そしてこの不思議さのなかに売春と臓器売買に関する倫理の違いがあるように思います。

森岡 なるほど。原物の贈与と、イメージの贈与との違いに注目することで、この問題群にあらたな展望が開けるかもしれない。

井上 臓器の場合は、写真なんかもらってもなんの役にも立たない。原物でなければ意味がないわけです。両者のあいだには、あきらかにギャップがあります。ですが、エロスの場合はそうじゃない。写真でもじゅうぶんにたのしめる。ひょっとしたら、現実の売春のほうが、エロスイメージの代用品なのかもしれませぬよ。本命は写真などのエロスイメージにある。できれば男たちは、それを自分の血と肉にまぜあわせたい。だけど

それができない。そこでしかたなしに、ワンランクもツーランクもおちる現実のセックスでまにあわせる。フェミニズムがエロスイメージに怒る本質も、このへんにあるのかな。

森岡 うーん。マスターベーション少年の美しいファンタジーですね。感動的ですな。

井上 私は、もう少年ではありません。中年です。

森岡 冒頭で言ったように、売春で売買されているものは「体」物体」ではなく「快楽」精神」なのです。売春で貨幣と交換されているのは、第一義的には「イメージ」だったのです。売春とはイメージの売買のことです。これに対して臓器移植とは、臓器という「物体」の移動のことです。一方は物体、他方はイメージ。ここに決定的な差があるのでしょうか。

井上 おそらく、フェミニズム陣営としてみれば、攻撃の本命はエロスのイメージなのでしょう。しかし、それを露骨にたけば、エロスをもてないものうらみととられる。プスのひがみだと思われる。それは、さけない。だから、それは売春につながるからだめだと批判するわけです。あたかも売春が悪の本命で、エロスのイメージは、その周辺にくるものであるかのようにとりあつかうわけです。こういう構図のなかで、売春が悪だといわれる部分もあるでしょう。とにかく、臓器の場合とは、まったく違いますね。逆なんですよ、「物」と「イメージ」のありかたが。

森岡 ところがですね。井上さん。さらに興味深いのは、一

方は物体の移動、他方はイメージの供与という、まったく異なつた性質をもつたこれら二つの事態に対して、「タダなら良いが金をとると悪い」という同一の倫理規範が適用されてしまうという点です。これはなぜでしょうか。

井上 うーん。なぜでしょう。

森岡 これはまだ仮説にすぎませんが、売春と臓器移植の間には、ある本質的な共通項があると思います。売春とは、生殖行為に基礎をおいたエロスイメージの供与です。臓器移植とは不治の病によってやがて死へと向かう個体の再生をねがってほどこされる物体の移動です。後者のような個体の内部での生命の「再生」に触れる行為、そして前者のような個体の死を超えた場面での生命の「再生」に触れる行為。物やイメージの供与が、このようないのちの「再生」に深く触れるまさにその地点において、倫理は、それらの供与が一方的な「贈与」の形をとることを要請するのです。

井上 バタイユっぽいノリですね。

森岡 あんなのと一緒にしないでください。この話は、いのちに関する我々の宗教性が現代いかに成立するかという、壮大なプランに基づいているのですから。

井上 そういわれますが、やはり、私は売春と臓器移植のちがいを強調したい。森岡さんは両方とも「タダなら良いが金を払ったらダメ」といわれましたね。しかし、セックスはほんとうに「タダなら良い」んでしょか。誰とでも寝る娘は、おサ

セとか公衆便所などといって批判されます。自分のエロスをイメージした写真をあちこちにタダでくばりまくる女もまあアホやと思われるでしょう。「タダでも良い」のは、特定のある人を相手にしたときだけです。臓器の場合は、そういくつものつも配れませんか性とは比較できませんね。でも、献血といつたことを考えてください。あれは、不特定多数のひとにタダで血をあげているわけですよ。セックスの場合だったら、まあ、とおられませんね。すくなくとも、倫理はこれを批判します。しかし、献血ならいい。この違いはなんでしょ。

森岡 井上さんは、「タダである」ということと「相手が不特定多数である」ということを、若干混同されていますね。ただ、確かに、不特定多数の問題は、献血や脳死の人からの臓器移植（臓器の場合も、多数ではないとしてもあきらかに「不特定」ではありません）と、売春との違いを、きわだたせませぬ。むつかしい問題ですね。たとえば、不特定多数の相手に、善意でもって性的贈与をする魅力的な女性がいたとして、世間は彼女のことをそんなに悪く言うでしょうか。

井上 悪くいうと思うよ。それが、倫理の立場やと思います。売春への罪悪視も、体を売ることではなく、この「不特定多数」に理由があるのかもしれないね。

森岡 現在、売血は禁止されていますが、人間の生きた「細胞」の売買は、国際的に公然と行なわれています。日本の生命科学の研究者たちは、ヒトの細胞を買ってきて、日夜研究を続

けているわけです。「からだ」とそのイメージに関する贈与と売買。その構造は、思いのほか複雑なようです。

井上 研究ならいいんですか。なるほど、セックスも研究という名目がたてば……。

森岡 あんなもん、研究の対象にするなんてむなしいですよ、ほんとに。それはさておき、「タダなら良いが金をとると悪い」の説明としては、もし金をとったら、金持だけがその恩恵を受けられて容認しがたい不平等になる、というのがあります。でも、土地や財産の不平等は容認できるのに、臓器やセックスの不平等はなぜ容認できないのか、私にはわかりません。

井上 結婚、一夫一婦制がそれですね。どんなひとつにも、平等にひとりずつ異性をあてがうという、原始共産制みたいなやりかたです。なぜ、土地や財産では、こういうメカニズムがはたらきにくく、セックスだとはたらきやすいんでしょう。これもなぜやね。

森岡 また、金がかからむと「道具化」がすむという話もあります。売春とは、男が自分の快楽の満足のために女性を道具として利用することだし、臓器売買も、じぶんの生命と健康のために人間の肉体を道具として扱うことである、というわけです。倫理学は伝統的に、人間や生命を「道具」として扱うことに反対してきました。しかし、我々の癒しがたい本性のうちに、人を道具として使うことへの衝動があることもまた事実であるように思います。売春と臓器移植に、この観点から鋭く迫って

いくことも可能でしょう。

井上 この対談も、互いが互いを道具としてとりあつかっているから、これだけヒートアップできたのかもしれないね。

森岡 はははは。

井上 しかし、売春がなぜ悪いのかという問いの、納得いく解答は、けっきょくわからなかったな。

一九八九年九月一六日昼下り

日文研の研究室の片隅にて